



Title	2024 年度（秋冬学期） 日本語15 実践報告
Author(s)	金谷, 由美子
Citation	日本語講座年報. 2025, 2023-2024, p. 57-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102682
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2024 年度（秋冬学期） 日本語 15 実践報告

金谷 由美子

1. 授業の概要と目的

本稿は、2024 年度秋学期の日本語 15 の授業実践の報告である。日本語 15 では、日本語文法とその教え方に関する比較的読みやすいテキスト（庵 2017、2018）を通して、①受講者が日本語文法や日本語教育に対する知識を深め、自らの目標言語である日本語に対する探求心を持つこと、②受講者が自らの日本語学習者としての経験を生かしつつ、文法教育のあり方を検討・議論することを通して、能動的かつ批判的に論文を読むことを学ぶことを目的とした。

2. 学習目標

- ①日本語学の基本的な用語を理解し、日本語について言語学的な視点から書かれた論文が読める。
- ②日本語の文法について考察・議論ができる。
- ③自らの日本語学習を振り返り、今後の日本語研究や日本語学習に役立てることができる。
- ④日本語教育や日本語研究に対する関心を深める。
- ⑤自分の考察をまとめて小論を書くことができる。
- ⑥自分で研究テーマを探ることができる。

3. 教材選択について

庵（2017）『一歩進んだ日本語文法の教え方 1』くろしお出版と庵（2018）『一歩進んだ日本語文法の教え方 2』くろしお出版の 2 冊を選択した。

これらのテキストを選んだ理由の一つとして、庵氏がこの 2 冊のテキストで目指しているものが学習者の「母語の知識を活かした日本語教育」であることを挙げたい。庵氏の言う「母語の知識を活かした日本語教育」というのは、第二言語習得における母語の影響を前提に、学習者の母語に関する知見を教育者が共有することによって、学習者にとって難しい部分とそうでない部分を把握し、効率的な説明や教授法を考案することを目指すものである。

庵（2017）は、中間言語（Selinker 1972）という考え方を認めながらも、母語の転移による誤用や非用（そして正用）が第二言語習得において存在することは、まぎれもない事実であるとし、日本語教育においても積極的に学習者の母語に対する理解を深

めることを後押ししている。母語の影響だけですべてが説明できるわけではないが、学習者の母語が第二言語習得に関係がないというのも、また、実態とかけ離れた主張であると言わざるを得ない。一見同じ誤用や非用に見えても、そこに至る原因が母語によって異なる場合があることも指摘されている（張麟声 2014）。「誤用分析は古い」と切り捨てられるべきではなく、母語の影響が今一度日本語教育においても見直されるべきであろう。

もう一つの理由は、日本語母語話者向けの日本語文法や日本語教育に関するテキストの場合、学習者は日本語に対する内省が十分に利かず、結果的に論文を批判的に読むことが難しいという実態がある。庵（2017、2018）の場合は、学習者の母語と日本語との対照を重要な要素として取り入れているため、自らの母語に対する内省を利かせながら、より積極的、かつ批判的にテキストを読むという姿勢が自然に持てるようになるのではないかと考えた。

テキストにある説明や議論は必ずしも受講生にとって平易であるとは言えないが、テキストで扱われている文法項目は、日本語の学習者として、あるいは、日本語教師や日本語母語話者向けの語学教師、翻訳・通訳など日本語を活かした職業に就くうえでも有益であると判断した。

4. 授業の進め方

授業の形態

【毎週の課題】授業前日までに、全員が課題文を読み、課題文の内容に関する予習課題を Google Forms を利用して提出。（母語と日本語の対照を含む）

【授業の前半】は、受講生二人による発表。パワーポイントを準備する。教室では一人ずつ発表。

（各章のテーマについて各自単独で発表を準備）

【授業の後半】は、講師による各テーマに関する補足説明と予習課題のフィードバックを行う。

【学期末課題】授業で扱った項目、または、日本語学習者として関心を持った文法項目について小論（2000 字程度）を書き提出する。

表1 授業で扱ったテーマ

1	ガイダンス（進め方と評価について） 「正用・誤用・非用：学習者言語についての見方」庵（2017）用語編6章
2	「それを教えてほしかった：文脈指示のソとア」庵（2017）第9章
3	「産出の難しさ：結果残存のテイル形」庵（2017）第10章
4	「気づかれていない難しさ：タ形とテイル形」庵（2018）第6章
5	「人の思いはさまざまで：と思う」庵（2017）第6章
6	「論文で大切なこと：“と考えられる”と“考えられている”」庵（2017）第7章
7	「コップの水は多い？少ない？取り立て助詞」庵（2018）第1章
8	「実はとても簡単：使役受身」庵（2018）第2章
9	「たすきがけは不要：直接受身」庵（2018）第3章
10	「例文に注意しよう：使役」庵（2018）第4章
11	「ドアは勝手に閉まるの？：動詞の自他」庵（2018）第5章
12	「“受難”の“んです”を救い出そう：ノダ①」庵（2018）第7章
13	「文末に接続詞がある？～わけだ、からだ～：ノダ②」庵（2018）第8章
14	「本当に難しいの？ は と が」庵（2018）第9章
15	「漢語動詞の自他」（講師による講義形式）

表内のテーマは庵（2017）庵（2018）の2冊のテキストの第一部の文法項目のタイトルからとった。第1週、第2週、第15週は講師による講義形式をとった。

5. 受講生の反応と今後の課題

本年度の受講生は、中国語母語話者が8名、ベトナム語母語話者が1名の計9名である。発表準備もきちんとされており、内容もテキストをよく消化したうえで独自の視点から切り込むことができたもの

が多かった。日本語のレベルも総じて高いが、後半は級友の発表を熱心に聞く学生とそうでない学生に分かれてしまったことが悔やまれる。

予習課題についてはGoogle Formsを使用し、提出に伴う煩雑さを解消した。提出された予習課題の内容を授業の後半で共有することによって、当日の発表担当者以外の授業参加度を高めることに努めた。また、文の適格性や容認性を問う問題では、何回か同学期開講の対照言語学概論受講者の日本語母語話者と非母語話者による回答を用いて、どちらの授業の受講生も母語話者と非母語話者の回答を比較対照するなどした。

当該文法項目の母語との対照によって、一定の関心を引き出すことができたのではないかと考える。日本語だけでなく、共通の外国語である英語や、受講生の母語である中国語やベトナム語と対照させることにより、言語間の違いに対する気づきを促すよう心掛けた。

反省点としては、学生の発表にほとんどの時間を割いてしまうことが多く、事前提出課題の結果を見ながら考察する時間がなくなる場合が多かったことである。これも、個々の学生が発表に対して意欲的であったためではあるが、タイムキーピングにもっと注意すべきだったという反省が残った。

期末レポートは、大半の受講生が母語と日本語の対照研究を行った。分量は、2000字程度としたが、特に上限は設けず、書きたいだけ書くという方針を取った。

ほぼ毎週内容が異なるので、各項目の内容に興味を持っても、深める時間が取りにくかったかもしれない。今後、受講生がこの授業で得た日本語や母語の文法に関する気づきを日本語の学習や研究に役立ててくれることを期待する。

【参考文献・テキスト】

- 庵功雄（2017）『一歩進んだ日本語文法の教え方1』くろしお出版
 庵功雄（2018）『一歩進んだ日本語文法の教え方2』くろしお出版
 張麟声（2014）『新版 中国語話者のための日本語教育研究入門』日中言語文化出版社
 Selinker, Larry. (1972) Interlanguage. *IRAL*, 10(3), 209-231.